

「信仰はチームプレーだ！」  
マルコによる福音書2章1-12節

### I 導入部

- みなさん、おはようございます。お祈りをします。

### 祈り

- 愛する天のお父様。あなたの尊い御名をあがめ、心より賛美いたします。
- 本日、このように、この場所で、ここにいらっしゃる、本当に尊い、あなたが愛しておられるお一人ひとりとともに、礼拝を捧げられていることを、心より感謝します。
- 私たちはあなたが必要です。あなたの助けなしでは、この世界にあって、希望を持つことはできません。だからこそ、このように、あなたに礼拝を捧げられることを、心より感謝致します。目には見えませんが、あなたがここにおられることを信じ、あなたに期待をします。
- ただいま、聖書が開かれました。あなたが、聖霊さまにあって、導いて、書かせてくださった、このいのちのことば、神のことば、あなたの思いを、私たちが本当に悟ることができますように。どうか、私たちの心を照らしてください。
- 罪深い者、弱き者が、取るに足らない者が、あなたと教会に立てられたゆえに語ります。準備の中であなたが助けてくださったことを信じます。どうか今も、助けてください。憐れんでください。あなたの心を、あなたが教会に語りたいことを、忠実に語るすることができますように。
- 今日江上先生は、浦和教会でご奉仕にあたっておられます。どうか、先生の上に、そして浦和教会の礼拝の上にあなたの助けがありますように。
- また、今日ここに来たくても、来ることができなかつた兄弟姉妹もおられます。あなたがその場所にあつて、あなたとの深い交わりを与えてくださいますように。
- あなたに、ただあなたに期待し、また感謝をして、私たちの主イエス・キリストのお名前を通して、この祈りをお捧げいたします。アーメン。

### テーマについて

- 8月と9月は、大学生の夏休みのシーズンです。なので、私たちKGK（キリスト者学生会）の主事にとっては、最も忙しいシーズンです。もちろん、休みも取ってはいますが、毎週のようにあちこちのキャンプに行っています。本当に感謝なのですが、ただ一つ残念なことは、水曜日の祈祷会に出られないことです。あと、数週間に出られると思うと、ワクワクしています。
- 8月の後半は、KGKの関東全体のキャンプが二つあり、そのうちの一つでは、江上姉が準備委員として奉仕していただき、本当に素晴らしいキャンプをもつことができました。100人以上の学生が参加していただき、クリスチャンになりたい、洗礼を受けたい、献身して牧師・伝道者になりたいという学生たちも起こされたことを本当に感謝しています。
- 9月は、学校ごと、あるいはブロックという地域ごとのキャンプが多くもたれています。先週は、私は中央大学のKGKのキャンプのために新潟に行き、あるいはこれも江上姉も参加して下さっていたのですが、渋谷・神奈川のブロックのキャンプがこれは横浜でもたれました。また、早稲田大学と上智大学のKGKのキャンプももたれ、そこでは野村兄が準備委員として大活躍して下さったと聞いています。
- 今週は、私は明治学院大学のKGKのキャンプに行き、その次の週には、全国の主事たちのこれはリフレッシュのためのものですが、それで私の長い夏が終わります。ぜひ、引き続いて、お祈りください。
- キャンプというのは、日本に生きるクリスチャン大学生にとって、非常に重要です。最近の大学生は本当に忙しいです。また、日々いろんな誘惑に取り囲まれています。そのなかで、あえて日常から離れ、立ち止まって、じっくり静まって、神さまとの時間をもつこと、またクリスチャン同士で、クリスチャンでない学生も含めて交わりをもつことは非常に貴重であり、大切なことです。もちろんこれは大学生でなくても重要であり、その意味でこの教会でもキャンプがもたれたことに感謝しています。
- キャンプで、大学生たちが、一緒に賛美をし、聖書の言葉を聞き、遊び、語り合い、また祈り合っている姿を見て、改めて思わされたことがあります。それが、今日のタイトルである「信仰はチームプレーだ!」ということです。チームプレーです。「珍プレー」ではありません。プロ野球珍プレー好プレーという番組がありまして、私も大好きなのですが、それではありません。確かに面白いミスも起こりますので、その意味では「珍プレー」の要素もあるのですが、今日みなさんに覚えていただきたいのは、「信仰はチームプレーである」ということです。

## II 本論部

### 1 その人たちの信仰を見て

- 先ほど司会者の方に読んでいただいた箇所には、「中風（ちゅうふう）」という、体が動かなくなる、そのような病気を、苦しみを抱えた一人の男が、四人の人たちによって、イエスさまのもとに連れて来られるというストーリーが描かれています。
- この四人の人が、この中風の人の家族だったのか、あるいは友人であったのかは分かりません。自力では、イエスさまのもとに行くことのできないこの中風の人の床をかついで、彼らはイエスさまがおられる家にやってきたのです。
- ところが、その家は人でいっぱいなんです。イエスさまがおられる家に人がいっぱいなのを見て、「うわ～今日はやめようかな」と思ったかもしれない。四人のなかで一人くらいは正直帰ろうかと思ったかもしれない。迷いや疑いがあったかもしれない。でも、彼らは、一緒に屋根をはがし、一緒にイエスさまのもとに突入していった。

### • 5節をご覧ください。「イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、『子よ、あなたの罪は赦される』と言われた。」

- 繰り返しますが、本日の説教題は「信仰はチームプレーだ！」という少々派手なタイトルです。普通、信仰というのは、個人プレーだと思われがちです。確かに、信仰はその人が信じるかどうかの問題です。信じるかどうかは、あなたが決めるべきことです。強制されるものでも、マインドコントロールされるものでもありません。あなたが信じるかどうかというのが信仰です。その意味で、信仰には個人プレーの要素も当然あります。
- しかし、ここでイエスさまは「その人たちの信仰を見」たと言っています。信仰が個人のものであるなら、なぜイエスさまは、「その人たち」の信仰を見たと言われたのでしょうか。

- まあ、タイトルにしているので、分かるかと思いますが、信仰というのは、個人のものであると同時に、チームでやるものなのです。個人プレーの要素もありますが、本質的にチームプレーある。繰り返しますが、もちろん信じるかどうかを決めるのはその人です。でもそこに至るまでは、必ず誰かの助けがある。チームが必要である。人は一人では信じることができないのだ。
- この中風の人がまさにそうでした。彼は歩けなかったんです。だからこそ、四人の人がかついでくれた。もちろん、それでも「僕は行きたくないです」と言って、それを拒否することもできた。その意味で、何度も繰り返しますが、最終的に信じるかどうかを決めるのは個人です。でも、この中風の人は、この四人の人の助けなしにイエスさまのもとに行くことはできなかった。
- イエスさまがいる家に、人がいっぱいなのを見て、「あ～今日はやめようかな」と思ったかもしれませんが。四人のうち、一人くらいは正直帰ろうかと思ったかもしれない。でも、最終的に、一緒に屋根をはがすという暴挙に出て、イエスさまのもとに突っ込んでいった。
- ここに、このストーリーが語るグッドニュース、良い知らせがあるのです。信仰は、信じるとは、一人で、孤独でがんばることではない。一人でがんばらなくていい。チームでやることなのだ。頼っていいんだ。それがこのストーリーが語っているメッセージなのです。

- 本当に、私の人生を振り返ってもそうだったなと思うのです。様々な人が私を、イエスさまのもとにかついでいてくれたのですが、まずは両親です。私は両親がクリスチャンであるのですが、彼らが私にイエスさまのことを教えてくれた。そして教会の方々が、私を愛することで、神さまの愛というのが、こんな感じなのかということも教えてくれた。イエスさまのもとに連れて行ってくれました。
- あるいは、たくさん友人たちが、私を愛し、励まし、また祈ってくれました。一人ではイエスさまのもとに行けない、行きたいくなくとも思ってしまうこともあった。でも、励ましてくれて、時には、もう多少強引に、屋根を破ってでも行こうぜと言ってくれる。今も KGK で、学生たちがそのような経験をしてきていることを本当に感謝しています。
- また、私は青葉台教会に来て、ようやく半年が経ちました。みなさんも、私を支えてくださった。どう見えるかわかりませんが、私は不完全で弱い人間です。私一人じゃ無理だった。今も、私一人で、信じられているのではない。チームに支えられて、今私はイエスさまのもとにいるのだということを実感させられます。

### 2 信仰のチームに招くために

- 「彼ら」の、チームの信仰を見たイエスさまはこのように言われました。「子よ、あなたの罪は赦される」。
- ここでちょっと「あれっ？」と思わないでしょうか。そもそも、彼らは中風という病を治してほしくてイエスさまのもとに来たのです。なのに、まず「罪が赦された」という宣言がなされた。

- で、この発言が問題を引き起こすのです。6 節からをお読みします。「ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。『この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。』」
  - ここに出てくる律法学者というのは、聖書、当時は旧約聖書しかないですが、その専門家で、宗教的な権威です。しかも当時は宗教と政治はひとつでしたから、政治的権力も持っていた。言うなれば、かなりこわい存在です。
  - 彼らも、ここにいたということは、イエスさまに興味をもってはいた。しかし、イエスさまの「子よ。あなたの罪は赦される」という発言に、違和感を覚えた。
  - 彼らは思いました。「そのような宣言は、神にしかできないことだ。でも、こいつは神じゃない。ということは、これは神を冒瀆する発言だ！」
- 
- イエスさまは彼らの思いを見破られます。イエスさまは心の中が分かるのです。さきほど見ましたが、中風の人と、彼を連れてきた人々の心のなかにある信仰を、イエスさまは見られました。そしてここでは、律法学者たちの不信仰、つまり信じない心を見た。そういう意味で、このイエスさまという方の前では、自分を偽ることはできませんし、そのような必要もないわけです。正直で良いわけです。
  - 当然ですが、いつだって、イエスさまを信じる人と信じない人がいます。それは個人の自由です。でも、イエスさまは、イエスさまを信じようとしないうる律法学者たちに対して、このように言うのです。
  - 8 節の続きからをお読みします。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。」
- 
- 「どっちも難しいやろ！」と突っ込んでしまいましたが、聖書的には罪を赦すほうが明らかに難しいです。なぜならば、病を癒すだけなら、聖書によれば、もちろん神の力によってですが、人間でも、やっているんですね。そして、たとえ病を一時的に癒したとしても、人間はやがて死にます。死なない人間はいません。あなたにも私にも、いつかは必ず死という瞬間が訪れます。事故や災害が起こるときに思い起こすことができますが、必ずしも年齢が若い人が後であるとも限りません。
  - でも、罪が赦された者は、死んだ後のことを心配する必要がない。もちろん悲しいです。寂しいです。でも希望がある。死んだ後に、もっとすばらしい神の国、天国に、新しい天、新しい地に入ることができる。だからこそ、イエスさまは、まず彼の罪が赦されるのだということを宣言された。これこそが、彼に最も必要な宣言であり、また私たちに最も必要なメッセージであるからです。
- 
- その意味では、このストーリーは罪の赦しの宣言だけで終わって全然問題ないのです。でも、イエスさまはさらにこう言われた。10 節。「『人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。』そして、中風の人に言われた。『わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。』」
  - 「人の子」というのは、旧約聖書で、救い主がやがて来るということを語るときに使っていたことばです。わたしは、約束通りやってきたメシアだ。わたしには罪を赦す権威がある。それを、今は信じていないあなたがたにも、知らせよう。いや、知ってほしいんだ。
- 
- ご存知のように、イエスさまはやがて十字架にかかります。全ての人を愛しているから、全ての人を罪を背負って、十字架で死なれる。だからこそ、イエスさまは「地上で罪を赦す権威を持っている」。それを信じて欲しい。「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう」、そう言って、イエスさまはあえて、この中風の人を癒すという奇跡を起こした。信じない律法学者たちを招くために、彼らもまた信仰のチームに加わって欲しいから、あえて奇跡を見せてくださった。
  - 奇跡は今も起こっています。もちろん病が癒されるという奇跡を経験することもあるかもしれない。私たちはそれを期待して、祈り続けていきたい。でも、もっとすごい奇跡は、今ここで起こっている。それは、人が変わることです。イエスさまの愛によって、聖霊の力によって、人の心が変わるということが、これまでも、そしてこれからも教会では起こり続ける。それを体験した人が、ここにもたくさんおられます。「救いの証し集」を読むたびに本当にすごい、奇跡がここでは起こっているということが分かる。
- 
- とはいえ、奇跡が起きても、人は信じるとは限らないんですね。律法学者たちは、すごい奇跡を見ました。でも彼らは信じなかった。彼らは、実はこの後も何度もイエスさまを攻撃していくのです。でも、これもこれからマルコの福音書を読むなかで分かるのですが、イエスさまはそんな彼らを何度も何度も招かれる。そして、やがて使徒言行録を見ると、彼らのなかからもイエスさまを信じる者たちが起こされていくのです。
  - あなたも招かれている。信仰のチームに、罪の赦しを受け取るチームに招かれ続けている。

- 律法学者と違い、そこにいた人々は、「**神を賛美した**」とあります。彼らは、イエスさまが誰であるかというものの詳細はおそらく分かっていなかったと思われる。不完全な知識かもしれない。それでも彼らは神を礼拝したのです。
- 礼拝、それは、まさに信仰がチームプレーであることがよく分かる場所です。一緒にイエスさまのもとに突入していく。誰かが動けないとき、かついで行く。それぞれの存在に、それぞれに起こった奇跡に励まされる。イエスさまのところに行くことを妨げるものがあるときには、それを押しつけて、イエスさまの愛のもとに突進していくチーム。それが教会である。ここには栄光が、平安がある。愛が、命が、恵みが、喜びがある。
- この教会が、これからもそのようなチームとして、信仰というチームプレーを、ともに、またそれぞれの場所で行っていくことを心から願っています。祈りましょう。